

地空間の整備が行なわれたというのは、お水取りの事例と同様のように思われる。お水取りでは龍神に託宣に基づき儀礼を実施し、さらには「龍神の血」という意味付けにより儀礼を実際的な「ご利益」と結びつけた。対して不動尊の場合は、靈能者の靈夢というかたちで整備をうながし、寺院側の協力を得ている。その際には不動尊を荒廃させたままだと善宝寺の驗力が半減するという解釈がなされている。その点では信者により聖地空間の再解釈と拡張が行われたといえる。

もう一点重要なのは、貝喰池のお水取りの儀礼と「龍神の血」という言説、不動尊における「驗力の半減」という言説が、寺院側・僧侶によってその宗教的解釈が受容されたということである。つまり寺院・僧侶側も信者の勝手な解釈であると拒絶せず、信者からの要請を取り入れていくことができた。なぜ善宝寺は信者からの要請を取り入れていいことができたかについて、その要因を四点指摘しておきたい。一つには善宝寺の信者の拡大、龍王講の発展という方針に合致したことがあげられる。二点目として、信者から要請が曹洞宗寺院としての、または教義の根幹に関わるような要請ではなかつたということである。三点目は僧侶にイニシアチブがある寺院中央部の再編を促すことではなかつたということがあげられる。信者が要請したのは貝喰池と不動尊という、中心部から離れた周辺地区である。中央部の再編を信者から促されるより、相対的に抵抗が低かつたのではないだろうか。最後に信者の要請は、既存の聖地空間に対して再解釈による意味づけをしたものであつたということである。お水取りの場合、以前は行なつていた行事

を“復活”させたことになっている。龍澤不動尊も以前に不動明王の靈場であつたところに“驗力の半減”からの回復という論理で整備していく。このような信者の要請は、新たな聖地の設置や既存の聖地を否定するものではなく、既存の聖地空間を他の解釈で再認識するものであつたことが、僧侶に受容される結果を生んだといえる。信者からの要請が善宝寺の立場と対立するような内容ではなかつたがゆえに、その要請が寺院側によつて「正当性」を与えられ、聖地空間の再編成につながつていったといえる。

仏神の現代的展開

——金毘羅神のポストモダン——

白川琢磨

一般に「金毘羅さん」として親しまれてきた讃岐の国、象頭山の金毘羅大権現の史料上の初出は、元亀四年（一五七三）の金毘羅堂建立棟札である。そこには、「金毘羅王赤如神」の宝殿を造営したのが「松尾寺別当金光院權少僧頭宥雅」であり、本尊鎮座の法楽の導師が「高野山金剛三昧院權大僧頭法印良昌」であったことが記されている。当時、松尾寺の本尊は本堂（觀音堂）に祀られる十一面觀音（聖觀音との説もある）であり、本堂北方には鎮守神として「三十番神」が祀られていた。本堂の別當は「普門院西淋坊」であつたと推察される。この金毘羅堂の建立を起点として、金毘羅神の三十番神に対する凌駕、金光院の普門院に対する凌駕が進行し、やがて金光院の一

山支配が確立する。この間の過程は地元の民間伝承にも表出されている。民俗学者、武田明が採集した「三十番神は、もともと古くから象頭山に鎮座している神であった。金毘羅大権現がやつてきてこの地を十年ばかり貸してくれといった。そこで三十番神が承知すると、大権現は、三十番神が横を向いている間に十の上に点を書いて千の字にしてしまった。そこで千年もの間借りることができるようになった」というものであり、また琴平町内には「松尾寺は金毘羅さんに軒先を貸して母屋を取られた」との伝承も認められる。共に、前述した力関係の変化を民間の記憶として伝えている。こうした変化は金毘羅神の神格にも影響を与えていた。当初は法華經守護の二十八部衆の「金毘羅王」に比定されたと思われるが、秘仏とされたため、薬師十二神将の「宮毘羅大將」説、そして四代院主宥暎による本地（＝釈迦如來）垂迹（＝大国主命）説による拡大を経て崇徳上皇の御靈をも習合していくのである。以上の変化は、近世における境内の変遷としても跡付けられる。当初、松尾寺本尊を祀る觀音堂、その別当である西淋坊（普門院）、神人らが祀る三十番神社という南側の系列を主に配置されていた境内は、金毘羅堂—金光院ルートの開発を軸に展開し、「大夫屋敷」の消失、觀音堂の侵食（後堂＝金剛坊の設置）、藥師堂（金堂）の設置、そして普門院の駆逐（滅罪寺院化による大門外への転落）などである。

しかしながら、金毘羅が設置された当初から厳重に守られてきたことの一つが祭りの形式である。祭日（十月十日・十一日）もそうであるが、現在に伝わる「神事奉物惣帳」は一部の

みが偽書であり、その基本は地元の頭屋・頭人の交代とその山上への奉告を伴う法華八講様式の祭りであったことが分かる。中心は、一日の「行堂巡り」であり、前立の小觀音を奉じた神輿が頭人らの行列と共に觀音堂の周囲を三回廻る行事であった。少なくとも近世末まで続けられてきたこの行事は神仏分離によって廢絶する。同時に、金毘羅大権現を奉じ、隆盛を誇った金光院も最後の院主、宥常が還俗し、神社の道を歩む。ところが、松尾寺そのものが廢絶した訳ではなかつた。山内で唯一寺院を継続したのは、滅罪寺として下位に位置づけられた普門院であった。長期にわたる神仏分離訴訟を経て、松尾寺の法灯を継いだ普門院宥暎は、金光院別邸の地に松尾寺を再興し、秘仏金毘羅大権現をはじめ、十一面觀音（博物館）、小觀音、三十番神、釈迦（薬師）如來、金剛坊宥盛文書内蔵の弘法大師像、金光院歴代の位牌、役行者像など破却を免れたほとんどの仏教的要素を本堂に安置した。以降、宥知・宥音・宥堯・宥傳・宥淨を経て宥昂・宥如の現住へと到るのであるが、現在、金毘羅大権現の別当として寺運の隆盛を期している。神社（金刀比羅宮）は「場所」は獲得したものの中身は失つた。しかし、七八五段もの石段を経て辿りつく場所としての金毘羅の靈威は、明治以降も継続してきた。一方、松尾寺に再帰した仏神、金毘羅は、今後何処に向かうのであるか。